

AAINews

APPROPRIATE AGRICULTURE INTERNATIONAL CO., LTD.

国際耕種株式会社

TEL/FAX: 042-725-6250

〒194-0013 東京都町田市原町田 1-2-3 アーベイン平本 403

E-mail: aai@koushu.co.jp Home Page: http://www.koushu.co.jp

ギニアおもしろ写真集

ギニアの首都、コナクリは年間 4000mm の雨の降る町である。この降雨のほとんどが6月から9月に集中するからすごい。日本では経験したことのない豪雨を何度も見た(写真)。今回訪問した時期はちょうど雨期にあたり、コナクリでは連日の雨であった。道路は川になり、いたるところに穴の開いた舗装道路は池になる。コナクリでは町の至る所にスラムがあり、町は非常に汚い。幸いにも、雨期には豪雨により町のゴミがきれいに流されてしまう。



写真、を見てほしい。ギニア内陸部に向かったときの状況である。

はタクシーに馬乗りになる乗客、数えたら外に 14 人、中は不明だがおそらく7人程度、合計 21 人となる。大変だ！これでも中に乗る人と外の人運賃は同じだそう。物ではない「乗客」は過積載にはいけないのだろうか。はトラックの後ろに落ちそうになって乗る人々。人ごとながら、もっと中に乗れば良いのと思う。は電柱であるが、柱はそこいらに転がっている材木のような気がした。また、写真にはないが電線には空き缶が鈴なりにぶら下がっていた。



ギニアは西アフリカに位置し、ギニアビサウ、セネガル、マリ、コートジボアール、リベリア、シエラレオネの6ヶ国と周囲で接している。フランス語圏と英語圏の境に位置し、紛争の絶えない地域であることも関係しているのであろうか、貧困層の多いアフリカ諸国の中でも最貧国に位置づけられている。1958年独立後、フランス語圏にあったが宗主国フランスと決別し、自主独立の社会主義による立国を目指した。しかし、社会主義の崩壊に伴い、支援国からの援助はなくなり、同時に国のインフラ(道路、電気、郵便など)はほとんど全てがまともに機能しなくなってしまった。タクシーの乗客も好きで乗っているのではない。移動手段がこのような方法しかないのである。トラックの上の人は遊んで乗っているのではない。道路事情が悪く、場所によってはこの人たちの路上からの指示と補助がないと進めないからと聞く。電柱の資材がなく(盗まれた?) 仮設にしたのだろうか。郵便も機能していないため、知人・タクシー運転手に手紙を託して連絡を取り合う。



今日、ギニアは日本を始め、国際機関や西側先進諸国の支援を受けて、貧困からの脱却をはかろうとしているが、前途は非常に多難であろう。外国の支援を当然のごとく受け入れ、それからの収入なしでは仕事をしようとする一部の技術者、また構造的な汚職や腐敗もひどく、政府資金の一部が賄賂に消えていくと聞いた。優秀な技術者はこのような国に失望・流出していくか、金儲けに走ってしまっているのではと感じる。高級官僚の収入でも月収1万円ほど、地方の野菜売りは1束2円のネギを一生懸命に売っていた。



今回の調査でギニア内陸部を歩いたが、子供の笑顔はどこでも良い。親切な人々に支えられながらいろいろな知見も得ることが出来た。今後もギニアの調査は続くが、「どげんかせにやいかん！」という気持ちもわいてくる。
(ギニアにて、2008年10月、財津)



第4回：芯止まりトマトでも整枝効果が見られる

ウリ科・ナス科野菜の果菜類では整枝をおこなう。野菜によってさまざまな整枝法があり、各節から発生する側枝を除去して主茎だけを伸ばし1本仕立てにするトマトの整枝法、一番花の下の節から発生する側枝2本を残し、それ以下からの側枝を除去、残した2本の側枝を放任とし、枝が混んでくれば適宜摘葉するナスの整枝法、下位節で本葉4~5枚時に摘心して主茎と本葉の間から出てくる勢いの強い子蔓を2~4本伸ばすスイカやメロンの整枝法がある。整枝の目的は病虫害防除・肥培・収穫などの管理を効率よくおこなうとともに、収穫物の品質を向上させ、収穫期間を集中させ耕地を集約的に活用することである。その効果は1) 過繁茂による相互遮蔽の回避、2) 作業性の向上、3) 病害発生軽減、4) 品質のそろった果実を適期に多数収穫、5) 圃場を有効に利用できるなどである。整枝に付随する作業としてa) 野菜の立ち作りでは支柱に主茎を結束、または細紐に枝を絡ませる誘引作業、b) 不必要なわき芽を小さいうちに摘み取る摘芽作業、c) スイカの場合には伸ばした4本の子蔓に4果ほど着果させ形の良い2果を残す摘果作業、d) その他、摘葉、摘心作業などがある。

本年2008年のサモアの研修員がおこなっているトマトの整枝法に関連する個別実験を紹介する。研修員は農業省作物局において展示圃場を通じた技術普及、野菜栽培グループ活動としての問題分析、対応策の検討、そして活動計画作成などを主な業務としている。彼の抱える現場の問題は、輸入種子の品質が悪いこと、農業省による種子生産が不十分であること、病虫害防除法の知識が不十分であることである。そして作物管理が粗放的なので品質の向上が難しくマーケティング・市場開発に影響していることである。カボチャ、キャベツ、キュウリ、ハクサイ、トマトがサモアで栽培されている主要な野菜で、中でも市場性の高い大果のトマトをどのように生産するかが第一の問題点となっている。サモアのトマト栽培は、赤色・大果の芯止まり系品種を移植時に短い支柱で支え、その後は放任としている。この栽培では収穫果実の大きさはばらつき、総収量は上がらない。そこでどのような日本の栽培技術が適応できるか検討し、着果枝の制限とその誘引による効果をみる個別実験をおこなった。

サモアの主要品種と同様の赤色・大果の芯止まり系トマトを使い、雨除けハウス内に株間75cm、畦間100cmで植え、着果枝数を2本、3本、4本に制限し地上1.8mのワイヤーに枝を誘引した区とサモアの慣行的な放任区を設け比較をおこなった。その結果、着果枝が2から3本に増加するに従い収穫果が増え収量も増加したが、4本区は減少し、放任区を含め4処理中3本区の収量が一番高かった。整枝をおこなうことは摘芽・誘引作業が増え、また誘引資材の経費が増加する。しかし、病虫害防除、雑草管理については収穫作業の効率が向上し、適期に収穫をおこなうことや果実が地面に接して起こる腐敗果を減少させることが可能となった。研修員は品質の向上が期待できることを肌で感じる事ができたと思う。

個別実験の結果を得て、研修員は帰国後におこなうアクションプランに整枝技術を適応したトマトの高品質多収栽培の計画を取り入れようと考えている。多くの途上国では耕地の集約利用の要求や収穫物の品質、収穫期間を含めて市場価値向上への要求は未だ少なく果菜類では地這い作りが主流であるが、作業性を良くし適期収穫がしやすい整枝栽培技術は収量の向上にもつながるため、今後大いに着目されるものと考えている。



3茎整枝の良果実



放任の果実は見つけにくい



誘引の様子

日本農業の今と国際耕種の関わり方

第4回：地域の中での研修 ～自然塾寺子屋の活動と地域連携(群馬県甘楽町)～

前号では、岡山県牛窓地区における生産者グループの活動と地域連携について紹介し、今後の取り組みとして新規就農希望者の応援活動や、海外からの研修員や青年海外協力隊（JOCV）候補生の派遣前研修等への関わりの可能性を示した。これと同じ観点から今回は、群馬県甘楽富岡地域においてこうした活動をすでに実践しているNPO法人「自然塾寺子屋」を訪問しているというお話すうかがった。

「自然塾寺子屋」では派遣が決まった協力隊員候補生の技術補完研修や海外からのJICA研修員受け入れ事業を実施している。こうした研修における大きな特徴の一つは地元農家や農協との連携である。研修実施にあたっては、「寺子屋」理事の熱心な働きかけに応える形で、JA甘楽富岡の青年部部長が音頭をとって地元農家に研修受け入れの協力を求めた。協力隊員の技術補完研修では、村落開発普及員では3週間、野菜隊員の場合は約6ヶ月の間、受け入れ農家の元で農作業を手伝いながら、地元にとけ込んで活動することで、派遣先で行う協力隊活動に有益な技術、知識やコミュニケーション力を養っていく。寺子屋での研修の特色は、実践に重きを置いている点である。PRAやRRAにしても座学ではなく、農家と一緒にお茶を飲んだり草取りをしたりしながら話を引き出すといった体験を積み重ねる。農家にとって隊員の受け入れはマンパワーとして使えるだけでなく、新たな「家族」の一員が増えることによって、日々の生活に新たな刺激を受けたり、家族で話し合う機会が増加するといった+の効果もある。

「自然塾寺子屋」は「ちびっこを元気に」をめざして2001年に任意団体として設立され、環境教育、青少年育成、国際協力を活動の三本柱として2003年にNPO化された。「寺子屋」の特徴の一つは、その活動が地域によって支えられ、そして活動の輪が地域全体に少しずつ広がっていることである。こうした活動の中から、過去に研修生を受け入れてもらった農家さん達を集めて、受け入れ組織の強化を行おうという動きが起こり、「甘楽富岡農村大学校」が2008年9月に設立されることとなった。これまでのJICA研修受け入れに加えて、Uターン・Iターン等による就農希望者に対する研修の場を提供しようという動きもある。このような活動が、今後さらに農家同士の横のつながりを強化したり、地域の活性化のためにお互いが協力しあえる組織作りにつながるものと考えられる。

「寺子屋」を中心とした活動は、国際協力を巻き込んだ形で地域の活性化をうまくやっている事例だと思われるが、基本的には寺子屋や農協のスタッフといったキーパーソンがリーダーとなって活動を広げる原動力になってきたと考えられる。また受け入れ農家の存在や、人と人とのつながりも重要である。これはキーパーソンとのつながりのみならず、キーパーソンらと地域の人たちとのつながりや、研修生を受け入れる農家の家族の協力とつながり等々である。さらに、寺子屋の活動が地域にとけ込むために、そこに住むことによって日常的な関係を構築し、信頼を醸成してきた点も見のがせない。今後の関わり方としては、地域農業の振興と活性化への貢献のため、国際耕種が間を取り持って、甘楽（群馬）、牛窓（岡山）、里美（茨城）をつなぐことによってお互いが知り合い、情報の共有を行い、そこから共に学んだり、将来的には連携して活動することも考えられる。そのような活動を通して、今後国際耕種が担える社会貢献のあり方を考えていくべきであろう。



自然塾寺子屋の概観



名物・下仁田ネギの畑



自然塾寺子屋の活動内容の聞き取り

ミニシリーズ：社友の活動を訪ねて

第3回：自然塾寺子屋による地域活性化と国際協力

3頁の記事で既に紹介したが、今回我々は群馬県甘楽富岡地域において国際協力を巻き込んだ形で地域活性化につながる活動を展開している「自然塾寺子屋」を訪問し、寺子屋や農協のスタッフから活動の詳細に関するお話をうかがうことができた。

国際協力に関連して協力隊技術補完研修や JICA 研修員受け入れ等様々な活動が展開されているが、この中で自然塾寺子屋としては JICA に対する実践型研修の提案、研修及び訓練に係る JICA との折衝、受け入れ農家との調整、勉強会や報告会のアレンジといった広範な業務を実施している。また、途上国で即戦力として使えるような農村の知恵や生活術、あるいは生活改良普及員が行ってきた生活改善の手法を講義と実践を通して習得させるような「フィールドワーク実践講座」を企画し実施している。この講座では、現地でワークショップを実施する際の手順、留意点、ファシリテーションスキル等を習得することができ、大学生・大学院生(開発学専攻)、青年海外協力隊合格者、NGO 職員等を対象者として3~4日間のコースが実施されている。さらに、群馬県在住の中高生(国籍不問)を対象に2泊3日の合宿を通じた国際交流「国際寺子屋」を実施しており、これは2003年から5年間毎年1回のペースで実施されている。

本活動の大きな特徴は、上述したような国際協力への支援成果のみならず、農村地域の活性化に寄与していることが大きな成果と捉えられていることである。我々の訪問中にも、パナマ人研修員のための食品加工の実習を垣間見たり、地域の生産者グループが自主的に立ち上げて運営している直売所を訪問したりする機会を得た。パナマ人の研修は「ららかんら」と呼ばれる甘楽町の施設で行われていた。この施設には視聴覚室や調理実習室が整っており、寺子屋がこれらを半日750円から2000円程度で借り、そこを使って講義や実習を行っていた。講師は地域のおかあさん達で、地域に昔からあるお菓子の作り方を教えたり、パナマのお菓子の話を聞いたりといったやりとりを観察できた。単に食品加工の実習ということだけでなく、ここには正に人と人とのつながりがあり、地域住民を巻き込んだ国際協力を強く感じた。

「健康の里：相野田農産物直売センター」と呼ばれる直売所は、正月休み以外は午後1時から夕方まで毎日開いているとのことだった。地域の生産物である減農薬・減化学肥料で栽培したコンニャク芋を使った生芋コンニャクが名物で、お店にはその他季節の野菜や惣菜等が並べられていた。生産者は午後1時まで売り物を直売所に持ち込み、簡易な伝票システムによって売上は各生産者に配分されるシステムになっている。店番は会員が担当するが、一人月3回程度の割合で順番が回って来るとのことだった。我々が訪問した時の店番担当者は、少し前に受け入れた訓練生との思い出を懐かしげに語ってくれた。ここでも、人と人とのつながりを見つけることができた。さらに、こうした直売所で扱っている食品の加工や販売のシステムを体験して帰国した研修員や任地に赴いた訓練生が、それぞれの現場で実施する地域活性化の活動の中でそのノウハウを生かすことが出来ればその波及効果は計り知れないものと考えられる。



甘楽富岡地区の景観



「ららかんら」での実習



健康の里相野田農産物直売センター